ひまわりからのメッセージ
10号
2012.1.10
西濃圏域
発達支援センター
ひまわり
発行人：中野たみ子

年頭に際して

年頭に、多くの方々から年賀状をいただきます。我が家に届く賀状は約六百枚。虚礼廃止などと言われますが、嬉しいのは何と言っても子どもたちの近況を伝える賀状です。「今年は○年生になります」、「成人式を迎えます」、「がんばって○○で働いています」等々、家族の写真や本人の写真が添えられているものも多くあります。一年一年の成長が見てとれて、幼い頃の思い出と重なり、「ああ、こんなになって…」と感慨に耽ることしきりです。

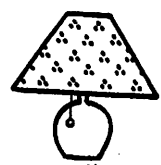
一方、私が出す賀状は三種類。家族のようすや一年の抱負を記したもの、少し改った形式のもの、そして子どもたち向けには一言を書き加えられるもの……。

色々な方々から、住所をパソコンに打ちこめば楽なのにと奨められるのですが、骨折した年だけで懲りてしまって、又手書きに戻ってしまっています。「忙しいんだから、いっそ年賀状をやめにしたら…」と言う声もありますが「生きている証だから…」と、取り合わないことにしています。それというのも、すぐに計画倒れになりそうな自分を知っているので、一年の計を立てて、それを皆さんに伝えることで、自分の気持ちを奮いたたせようという目論見なのです。人の手を借りて、この一年を少しでも豊かに意義あるものにしていこうなどと、むしが良すぎるとは思うのですが、何しろすぐにへたりそうな私なのです。

昔、私の尊敬する恩師は「生徒が新しいことに挑戦するのなら、私も何かに挑戦する」とおっしゃいましたが、私の心の中には、いつも師のことばがあります。子どもたちと関っている私たちが現状で足踏みしているわけにはいきません。三日坊主にならないように、不言実行ならぬ有言実行としたいものです。

皆さんは、どの様な計画を立てられたでしょうか？今年もよろしくお願いします。

学校と家庭と……
子育てに大切なこと



私のもとには、様々な相談がもち込まれますが、昨年末にこんなことがありました。

「うちの子の担任の先生は、ひどいんです。だから、こんな文章を出します」と言われるので、見せていただきました。それには、何と「抗議文」とあるではありませんか……。私は、思わず「抗議ですか……」と言ってしまいました。そして内容を読ませていただいて、やはり適切な文書だとは思えず「もっとお考えになるべきでしょうね」と答えました。

特殊教育から特別支援教育へ…という流れは、まだまだ教育界全体に行きわたっているとは思いません。特別支援学級や通常学級の中で、一人一人の教育的ニーズにそって個別指導計画や教育支援計画が立てられ、支援されているかというと、先生方の熱意にもかかわらず、保護者の方との間に大きなへだたりがあることも感じる日々ではあります。

では、私はどうでしょうか？

大学で心理学を学び、教員免許をもち、言語聴覚士や心理士や特別支援学校の専修免もちって、"専門支援員"などと言われ、四十年以上も発達に弱さや困り感をもつ子どもたちと接してきているにもかかわらず、知らないことが何と多いことでしょう。一人の困り感をもつ子と向き合って、自分の無力をどんなに思い知らされることか……

人は完璧ではありません。まして一人の人間が出来得ることなんぞ、ほんの小さなことに過ぎないのです。

お母さんたちが、自分の子のために、園や学校に対して要望される思いはよく分かっているつもりです。けれども、私も含めて、子どもたちに関わっている先生方も「何とかしたい！」と思っていらっしゃるし、「どうしたらいいのだろう？」と悩んでいらっしゃるのです。しかし、残念ながら、私たちの子どもにマニュアルはありません。同じように見えても一人一人ちがいます。Aさんに対してうまくいった方法がBさんには通じないのです。それが難しいところです。

前述のお母さんに、私はお子さんの状況を聞いて、家庭でまずできることは何か考えて、いくつかアドバイスをしてみ

ました。しかし、「学校が悪い、担任が悪い、担任さえ代われば……」と考えていらっしゃる様子で、メモも取られなければ「家で試してみます」の一言を聞くこともなかったのです。

子どもたちは、学校に行くのをしぶったり、学校で友だちとトラブルを起こしたり、授業中に勝手な発言や離席があったり……と、様々な行動をとります。「家では全く問題がないのだから、学校が悪いのだ」と思いがちですが、本当にそうでしょうか？

自分の身の回りのことはできているでしょうか？ 片づけはできるでしょうか？ 明日の持ち物の準備はどうでしょう？ 家庭生活の中で、きちんと気持ちが切りかえられるでしょうか。要求を通さないと大声を出したりするので、いつも子どもの要求を通しているということはないでしょうか？

私は決してお子さんができないことを指摘しているのではありません。お母さんが日々の生活の中で当り前になってしまっていることが、集団生活の中でお子さんの困り感につながることがたくさんあることを知ってほしいと思うのです。

家庭でできることは何なのか、考えながら、学校の先生と話し合い、協力してもらいながら、子どもの自立に向けて一緒に歩んでほしいと思うのです。

先生方も、自分が担任した一年で完結すると考えずに次の担任に引きついでいってもらうことが大事だと思うのです。

一人の子どもに育てにくさがあり、子ども自身が困っていることを分かった時に私たちがやるべきことは、一人に背負わさないことだと思うのです。お母さん一人に背負わせることも、担任だけが悩むことでもなく、一緒に考えていくことが大事ではないでしょうか。

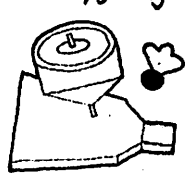
〜・〜・〜・〜・〜

先日、見知らぬ青年から電話がありました。「K病院で大人の発達障がいはないと言われましたが、どうしてですか？」という質問でした。少しお話すると、今度は私の一言がひっかかるようで、話は終わりません。仕事がこみ合っていたので電話を切らせてもらうのですが、しばらくすると又かかってきて、同じ質問のくり返しでした。一方的に話をされるのを聞きながら、この方は「今、お時間よろしいでしょうか？」と相手にたずねることさえ学んでこなかったのだと思いました。「高校は卒業しました」とおっしゃっていまし

たが、このままでは社会の中で仕事をしていくことは難しいに違いありません。二十五歳だとおっしゃっていましたが、ご家族はどの様に考えていらっしゃるのでしょう。

うちの子は、まだ小学生だから……と言う前に、私達が考えていかなくてはいけないことは、たくさんあるのではないでしょうか……？考えさせられた一時でした。

家庭でできること、家庭でしかできないこと、学校でしかできないことをもう一度考えてみませんか……？



子どもの自覚（自立）に向けて

今年度、大垣市では、岐阜大学の橋本治先生を招いて、小・中学校で「だれもが研修」という研修会が行われています。

橋本先生は不登校やいじめ問題などの相談もなさっており、発達障がいのエキスパートとして有名な先生です。

研修会は、子どもをどの様に理解していくのか、何に困っているのかという視点を教えられることが多いのですが、取り組みとして「三つの段階」を意識することが大切であることを、先生はくり返し、おっしゃいます。しかし、その三つを明確に分けることはできないので「～中心の段階」と言い表されています。

Ⅰ 対処が中心の段階

教室をとび出したり、暴力をふるう、自傷行為など緊急を要する場合には、人員を余分に配置したり、クールダウンの部屋を用意したり、緊急の措置が必要で、このような段階を「対処が中心の段階」と考えます。

Ⅱ、支援が中心の段階

このような行動に到った原因や経緯をよく観ていくことで、支援の手がかりを見つけていく。初期段階のかかわりによって大きく崩れない経験を積んだり、未然に防ぐことも可能であり、このような段階を「支援が中心の段階」と考えます。

Ⅲ、自覚が中心の段階

支援を上手にすれば、通常学級の中でもほとんど困

ることもなくなる。(特に低学年)しかし、思春期を越え社会に自立していくまでの長期的な視野に立って考えると、この段階を抜きにしては考えられない。つまり、Ⅱの支援を自分自身でできることが、この段階です。

少し調子を崩しそうなのでゝしておこうとか、自分はそう思わないが周りを見て一応合わせておくというように、自分で支援を考えて、対応する方法を冷静に見つけ出すことができる段階と言えます。

橋本先生は、幼児期にもⅠ→Ⅱ→Ⅲがあり、小学校四年生くらいまでの子ども時代にもⅠ→Ⅱ→Ⅲがあり、小学校五年生くらいからの思春期にもⅠ→Ⅱ→Ⅲがあって、Ⅲの仕上げがとても重要だと考えられています。

アスペルガー症候群のお子さんなど、早期に多少の異和感はあっても気づかれにくく、思春期以降に大きな問題があらわれてくることが多いにもかかわらず、小学校二年生ころまで殆ど問題にならないこともあります。

専門家チームの巡回でも、Ⅰ・Ⅱと比べるとⅢまで踏みこんだ相談は少ないとのことで、今後、この段階をしっかり押さえていく必要があると思われます。

保育園での保育でも、加配が必要なお子さんに補助の保育者がつくことが当り前になっています。では、Aちゃんについた補助の保育者B先生が、Ⅲの段階まで考えているかというと、なかなかそうはいきません。Ⅰの段階であったり、Ⅱで止まっていることも多いのではないでしょうか。CLMを提唱している三重県小児医療センターの中村みゆき先生も「支援の引き算」ということを言われますが、それは、一人ひとりの子どもの発達をしっかりとらえて始めてできることだと思います。小さいからできない、あるいは障がいがあるからできないと考えずに、今、どういう支援が必要なのか、そして自立に向けて、支援を少なくしていくにはどうするのか、常に考えていくことが大切なのでしょう。

療育機関でも同じことが言えます。どの子にもテンションを上げた声かけや働きかけが良いとは限りません。同じ教具を使っていてもAちゃんの療育のねらいとCちゃんのねらいとは異っているはずです。一対一の療育が必要な子であるのか、小集団療育が必要な子なのか、その場合の子どもと大人の人数配置はどうなのか、お母さんがお子さんに

ついてどの様に理解できているのか、総合的に考えながらその子に今、必要な療育をご両親と共にやっていかなくてはいけないでしょう。この時期のご両親の理解は、その後の子育てにとって最も重要になると思います。療育機関の大きな役目は、子育て支援にあると言っても過言ではないと私は考えています。生活の中の一つ一つに対して、どんな支援が必要で、どんな時に見守り、待っていくか、励ましや賞讃のことばをどの様にかけるかなど、子育ての基本的なところの支援が細かく伝えていけるのも療育機関ならではではないでしょうか。

そして幼児期から、自分の意思をことばで伝えることができるように、相手のことばを聞くことができるようにしていくことにも心を注いであげたいと思います。

先日、小学生のお母さんから「幼児期には特に何か問題だと言われることはなかったのに、三年生や四年生になって、急に学校から困ることを言われるようになるってこと、あるのでしょうか？」と質問されました。「もちろん、ありますよ」。と私は答えましたが、その場合も「ことば」の壁が問題になることが多いと思っています。

三、四年生の子で、知能の問題のなく育ってきたのに、「先生の言ってること、訳わからん！」「友だちの言ってること、わからへん！」「僕の言うこと聞いてくれへん」。というようなことが意外に多いのが現状です。授業中に言われることばが理解できないことも、授業中の行動にあらわれる離席や勝手な発言に結びつきますが、何より、自分が置かれている状況や自分の困り感をうまく言い表せない苛立ちをどうしていったらいいのかにつまずいているのを感じるのです。

子どもたちが感じたり思ったりしたことを、まとめ上げて表現することに手を貸していかなくてはなりません。小学生になって作文がうまく書けない子にも同様の支援がいるでしょう。また、思ったことをすぐ口に出してしまう子には、内言化して、ことばに出さずに頭の中でことばを操作していけるようにしていくことが必要です。そうした外からの支援を受けながら、最終的に自分でできるようになっていくことが自覚、自立への道と言えるのでしょう。

※二月の親の会は十四日です。